

日本統治時代の台湾で学校教育として日本語を 習得した人の現在の日本語使用

—簡（2011）に倣う—

野田 智子

1. はじめに

台湾は、1895年の日清講和条約の締結によって清から日本に割譲され、1945年までの半世紀にわたって日本の統治下に置かれた歴史を持っている。この半世紀の間、台湾において日本語は「国語」とされ、多民族からなる台湾の統治の手段として「国語」普及計画が学校教育や社会教育の中で推進された。

簡月真は、今なお台湾内で使用される日本語、特にリングフランカ（Lingua franca、域内共通語）としての使用例をつぶさに調査し、多数の先行研究を発表している。

本調査は2019年9月、台湾南部（高雄県・屏東市）で表題のとおり「日本統治時代の台湾で学校教育として日本語を習得した人の現在の日本語使用」を調べたものである。リングフランカとしての使用例を対象とはしていないが、簡（2011）との共通点を有しており、比較検討が有意義であると思われる。従って、簡（2011）の手法に倣って本調査の結果を示したうえで、共通する2項目について簡（2011）との比較検討を行った。

両調査の共通点は否定辞と丁寧体の使用においてみられた。一方、一人称代名詞、可能表現、「でしょ」の新用法〈新情報認知要求〉では、共通点を確認することができなかった。また、簡（2011）の分析項目ではなく、本調査のみの考察を加えた項目は、過去形の曖昧さとアスペクトの的確さ、西日本方言の影響、「いる」の「ある」への集約、副詞・接続詞・助詞・助動詞の的確な使用、他動詞「思い出す」である。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節で簡の先行研究（2011）を概観する。第3節では本調査の概要と被調査者の属性等を示す。第4節で本調査の結果を簡（2011）の分析項目に倣って述べ、次いで本調査のみで得られた結果を述べる。第5節は否定辞と丁寧体の使用についての簡（2011）との比較であり、第6節はまとめである。

2. 先行研究の概要

簡月真らによる先行研究には「台湾に残存する日本語にみられる方言的要素－存在動詞オルと否定辞ンを中心に－」（2002）や、「共通語として生きる台湾日本語の姿」（2005）、「台湾高年層の日本語にみられる一人称代名詞」（2006）などがある。台湾におけるリングフランカとしての日本語使用の様々な特徴を、フィールド調査によってデータを収集し分析を重ねている。簡の著書『台湾に渡った日本語の現在－リングフランカとしての姿－』（2011）は、これらの分析を一定程度まとめた内容になっており、主な調査地は花蓮県である。

2.1 台湾における日本語のリングフランカとしての使用

1895年、台湾が統治下に入ると日本政府は台湾全土に日本語教育を開始した。それまでの台湾は、「アタヤル語・アミ語・サイシャット語・ツォウ語・パイワン語・ブヌン語・プマ語・ヤミ語（現在ではタオ語とも呼ばれる）・ルカイ語・平埔族諸語といったオーストロネシア語族に属する言語を話す原住民族と、17世紀以降中国から移住してきた閩南語、客家語を話す漢族が共生する島であった」（渋谷・簡2013：108）。従って、19世紀末から台湾全土に普及した日本語が、初めて島全体の共通言語となったのである（簡2011：27）。

日本語教育は国語として学校教育の中でも行われ、1940年の国勢調査によれば日本語の普及率は台湾人口の30.18%に上った（簡2011：16）。第二次世界大戦後、日本は台湾の領有権を失い、変わって中国政府が統治することとなった。日本語や原住民族が母語とする諸語は禁止され、北京語を標準とする中国語が国語とされた。

しかし、簡（2011）の調査地である花蓮県などでは、実際は公的な場以外で日本語は頻繁に使用されていた。日本語使用禁止の通達が1971年に中央政府から花蓮県地方政府にあてて出され、取り締まりが行われた。つまり、それほどに日本語が普及していた。花蓮県はアミ語を母語とするアミ族が約80%を占め、そこに閩南人や客家人が混ざり住んでいる地域である。そのため、異なる言語集団の高年層の間の接触が非常に頻繁に起こり、その際の意味疎通の手段として、まさにリングフランカとして日本語を使用せざるを得ない状況であったのだ（簡2011：28）。

リングフランカとは、『言語学大辞典第6巻術語編』（亀井・河野・千野編1996：1391）

によれば「異なる言語手段間の実用的なコミュニケーション手段として使用される共通語（common language）のこと」であり、「ある時代に特定の地域で（あるいは特定の複数の民族間で）慣習的に確立した共通語をさす概念」である¹。花蓮県などでの日本語の使用実態はまさにリンガフランカである。

1987年、規制緩和によって中国語以外の諸語の使用禁止が解かれはじめ、1993年には禁止条例も撤廃された。現在も、花蓮県周辺では高齢層の母語を異にする者同士の会話ではリンガフランカとしての日本語が使用されることがある。他に、桃園県、屏東県、南投県など台湾各地で同様の使用状況が観察される（簡2011：31）。

以上が台湾におけるリンガフランカとしての日本語使用の背景である。この事実に焦点を当てた簡（2011）の概要は以下のとおりである。

2.2 簡（2011）の概要

簡（2011）の予備調査は1999年12月と2000年5月の2回、本調査（簡（2011）の根幹をなす調査）は2000年7月から2008年6月にかけて断続的に行われた。予備調査で200人余りのインフォーマント調査を行い、その中から「リンガフランカとしての日本語の使用」の調査に適した20人を抽出した。母語が通じない場合の使用の調査であるため、インフォーマントの ethnic group language (EGL) はアミ語、タオ語、ブヌン語、閩南語など様々である。調査項目によっては、この20人からさらに数人を抽出して行っている。調査地は花蓮県および周辺であるが、2.3.5の「でしょ」の新用法には屏東県のデータが含まれる。

調査方法は、面接によって自然談話データの収集を行い、それらを分析し考察を加えるというものである。LF (Lingua Franca) ドメインと NS (日本語 Native Speaker) ドメインの、2つのドメイン間での切り替えも観察項目となっている。端的に言うと、前者は異なる EGL 間の日常生活の中での会話、後者は初対面の日本語母語話者との会話である。ドメイン (domain) とは、Fishman (1964) において提唱された「参与者」「場所」「話題」の3要素から成り立つ概念である（簡2011：41）。

¹ さらに同書（亀井・河野・千野編1996：1392）では、「近い過去における植民地支配の名残りとして、例えば、韓国・北朝鮮、台湾、ベラウなどで、ある世代より上の人々に日本語が通じるというような現象は、多民族社会の知恵として生み出された広域共通語とはまったく性質の異なるものとして把握すべきである」と述べており、「異なる言語手段間の実用的なコミュニケーション手段」に当たらない場合はリンガフランカとはいえないとされる。

簡（2011）による分析項目は、大別して、一人称代名詞、可能表現、否定辞、丁寧体、「でしょ」の新用法－〈新情報認知要求〉－である。

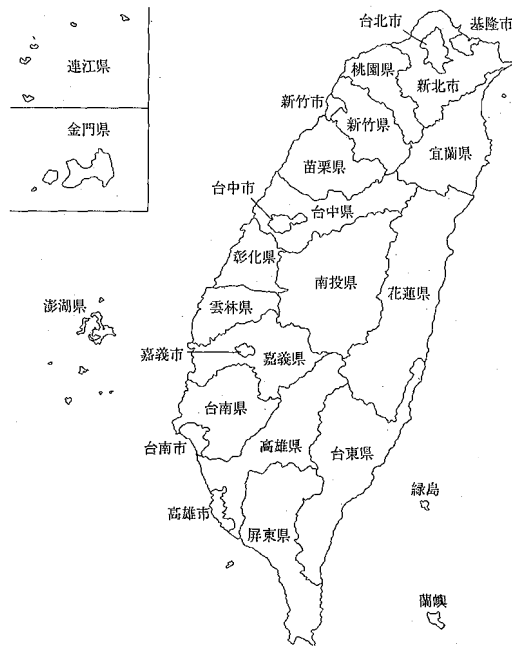


図1 台湾地図
簡（2011：47）より

2.3 簡（2011）の主な調査結果

簡（2011）のそれぞれの項目ごとの調査結果の概要は以下のとおりである。なお、全ての項目でLFドメイン、NSドメイン間での切り替え使用は観察された。

2.3.1 一人称代名詞

日本語での会話の中で閩南語の一人称代名詞 *gua*、*guan* が使用される場合がある。閩南語母語話者以外の、アミ語母語話者、ブヌン語母語話者、客家語母語話者も閩南語の *gua*、*guan* を使用している（簡2011：58）。日本語の一人称代名詞には「ワタクシ・ワタシ・ボク・オレ」など多くのバリエーションがあるなどの理由で単純化をはかろうとする心理的要因が関わっていると考えられる（簡2011：66）。

簡（2011：66）での使用例は以下のとおりである。

(1) guan ノ病気はなっ、なかなか治らない。

[NS 談話]

二人称、三人称にも閩南語形が見られたが、いずれもデータが少なく、簡（2011）では分析の対象とされていない。

2.3.2 可能表現

五段動詞・一段動詞の語幹それぞれに接尾辞-eru・-rareru が後接する派生動詞の形式、および、スルコトガデキル、動詞ル形+デキル、デキルの汎用などのデキル系統の形式が使用される。派生動詞の可能表現よりデキル系統の可能表現が多用される。簡（2011）は、「その根底に流れているものは、単純化、すなわち合理化を求めるといった潮流である」としている。

2.3.3 否定辞

方言形ンと標準語形ナイが用いられているが、インフォーマントは「ナイ専用型」、「ナイ・ン併用型」に分かれた。後者は一段・カ変・サ変でナイを専用（つまり一段・カ変・サ変動詞でのンの不使用）、五段動詞でナイとンを併用する型であった。

「ナイ・ン併用型」によるンの使用では、五段動詞のなかでもラ行五段活用動詞での使用が多くみられた（要らん、足らん、わからん）。様々な分析の結果、簡（2011：105）は「ラ行五段動詞にンが用いられやすいのは、ンガラと結合して一つの形態素となり、ラ行五段動詞での否定形が「～ラン」と見なされたためと考えられる」とした。簡（2011）はインフォーマントにとって、これを方言形ンとしての使用の認識はないとし、「ンがもともと持っていた方言形的性質がインフォーマル形式に転換し、活用されている様相を観察することができる」（簡2011：105）としている。

2.3.4 丁寧体

日本語の<丁寧さ>は「丁寧体」と「普通体」の二つの対立項の選択が義務的であり、形態的な処理が必要である。半世紀以上にわたって日本社会との接触がほとんどない簡（2011）の話者の日本語において、この<丁寧さ>がどのように用いられているのかを観察するために、簡（2011）では丁寧体と普通体の使用状況と切り替えを調べた。また、主節および従属節別にも集計した。その結果、話者は「丁寧体多用型」と「丁寧体稀用型」

に分かれた。

2.3.5 「でしょ」の新用法—<新情報認知要求>—

現代日本語の「でしょ」の用法には大きく<推量>と<確認要求>の2つがあるとされてきた。三宅(1997)によれば、<推量>は基本的用法で「話し手の想像の中で命題を真であると認識する」ものである。そこから派生して「話し手にとって不確実なことを聞き手によって確実にしてもらうための確認を要求する」用法、<確認要求>が生じた(三宅1996)。<確認要求>はその確認の対象の差異によって、さらに「命題が真であること」の確認を要求する<命題確認の要求>と、「確認の対象である知識を、聞き手が有していること」の確認を要求する<知識確認の要求>に分けられる(三宅1996)。これをまとめると以下のようなものである。

(2) 三宅(1996・1997)による「でしょ」の用法

(ア) <推量>

(イ) <確認要求>

(イ-1) <命題確認の要求>

(イ-2) <知識確認の要求>

上記の各用法を示す例文は以下のとおりである。

(3) 明日は雨が降るだろう。 (三宅1997) <推量>

(4) 「金沢、寒かったでしょう」

「ええ、雪がいっぱい降ってて」 (三宅1996) <命題確認要求>

(5) 「あのね、駅の地下街にね、『テイク』ってブティックがあるでしょ」

「うん、ある」 (三宅1996) <知識確認要求>

簡が台湾各地で初対面のNSドメイン調査で「でしょ」の用法を調べた結果は以下のようであり、「その他」が非常に多かった(簡2011:129)。

表1 簡(2011)の「でしょ」の使用数
(簡2011:128より)

No.	用法	使用数
1	推量	9
2	命題確認の要求	14
3	知識確認の要求	219
4	その他	262
	合計	504

※引用節に現れた「でしょ」は考察対象からはずしたとのこと

「その他」262例のうち、146例は聞き手が知るはずのないことに用いられている(簡2011:129)。以下は使用例の一つである。

- (6) <略>その時は、わたし研究したんでしょ。ヤミ語の、話で研究したんでしょ、僕は。だからローマ字にあ、その人がわたしにおし教えてね、<略>

(簡2011:130)

話者が「研究した」ことは、相手にとっては新情報である。このような話題の導入方法を簡(2011)は<新情報認知要求>とし、談話展開の役割の一つとしての使用を確認した。

この用法は台湾以外の東アジア残留日本語と日本国内の日本語でも観察され、簡(2011)は「現代日本語の「でしょ」にも<新情報認知要求>という用法を認めるべきであると考え(簡2011:138)」としている。

3. 本調査の概要とインフォーマントの属性

本節では本調査の概要とインフォーマントの属性について、またデータの特徴と表記方法について述べる。

本調査は2019年9月13日、14日、16日の3日間で、「日本占領時代に学校教育として日本語を習得し、今も話すことができる人」3人のNSドメイン(日本語母語話者つまり調査者の野田による面接)調査を行った。それぞれ調査時間(談話録音時間)は30分~40分程度である。

簡（2011）の主な調査地（主には花蓮県）とは異なり、本調査は高雄県及び屏東市内で実施した。また、本調査のインフォーマントの中に、現在リングフランカとして日本語使用をする人はいなかった。

質問用紙（調査票）は文末の〔付録1〕を用いた。主に調査者が口頭で質問し書き込む方法で行った。この質問用紙（調査票）に沿って会話を行い、得られた談話データを用いて分析を行った。また、質問に関係のないやりとりも一部分析の対象とした。

Q1の設定は、簡（2011）の予備調査の項目の中から、比較的良好に日本語が使われたドメインを抽出したものである。Q2、Q3は、それ以外の場合を拾うために設定したものである。

各インフォーマントの属性は以下のとおりであった。

表2 本調査のインフォーマントの属性

	A	B	C
性別	女	男	男
年齢（調査時）	84歳	90歳	86歳
EGL	閩南語	客家語	閩南語
日本語学習歴	7歳から1年	6歳から6年	6歳から5年

※A、B、Cは調査順

調査者以外の参加者としてAの調査ではAの知人1人（閩南語母語話者、日本語は話せない）、Bの調査でBの知人1人（閩南語母語話者、日本語は堪能）、Cの調査では調査者の知人として4人（閩南語母語話者2人、日本語母語話者2人）が同席した。A、B、Cのいずれの場合も調査中に調査者以外の参加者がインフォーマントに対して日本語以外の言語で通訳目的等で発話した。また、調査者（野田）が中国語で質問する場合もあった。インフォーマントもしばしば日本語以外で発話した。従って、得られた談話データは日本語以外の発話が頻回に挿入されるものであったが、本調査では主に文、節レベルの日本語以外の発話は分析データから除外した。

本調査結果には、言いよどみや発音が不明瞭な部分を省略したり、注を加えた箇所もある。注記は※、< >などを用いて示した。当該項目として重要な箇所は下線で示した。発話データの引用の中で、配慮すべき個人情報〔 〕内にカテゴリのみを示した。本調査の提示例文の直後の（ ）では発話の意味および発話状況を示した。

4. 調査結果

本節では、4.1で本調査の日本語の使用状況を確認し、4.2以下で本調査の結果を簡(2011)の分析項目に従って述べ、次いで本調査のみで得られた考察を述べる。

4.1 日本語の使用状況

各インフォーマントの日本語の使用状況は以下のとおりであった。

表3 本調査のインフォーマントの日本語の使用状況

	A	B	C
今誰と日本語を話すか	相手はいない	たまに孫と話す	相手はいない
日本統治時代、誰と話したか	学校で1年だけ話した	国語だったから学校、家、地域でいつも話した	学校の授業のときだけ話した
戦後、どんなときに使ったか	日本料理店で仕事をしていたとき	相手が日本語を話すとき	仕事で原住民(タイアル族等)と話すとき等
(現在) 暗算	使う	使う	使う
(現在) 祈り	使わない	使わない	使わない
成人後の再学習	有	有	有

4.2 言語項目の分析結果

以下、簡(2011)で大別した5つの分析項目を対照しながら、本調査の結果について述べる(4.2.1から4.2.5)。さらに、本調査のみにおける考察を述べる(4.2.6から4.2.10)。

4.2.1 人称代名詞

簡(2011)では一人称代名詞を主眼点としたが、本稿では二人称、三人称についても簡単に紹介する。

一人称代名詞では簡(2011)が述べるような、閩南語 *gua*、*guan* の使用はみられなかった。一人称代名詞としてA(女性)は「わたし」、B(男性)は「ぼく」「ぼくたち」、C(男性)は「ぼく」「わたし」「わたくしたち」を使用した。Cは「わたしたち」と「おたくたち」を言い間違える場面があった。

それぞれの使用回数は以下のとおりである。

表4 本調査のインフォーマントの一人称代名詞の使用回数

		A	B	C
一人称単数	わたし	5	0	1
	ぼく	0	13	2
一人称複数	ぼくたち	0	3	0
	わたくしたち	0	0	1
	おたくたち (誤用)	0	0	2

使用例は以下のとおりであった。Cは「わたしたち」と間違えて「おたくたち」を一人称として2回使用した(手のひらを話者自身に向けて前後に動かしながら話したので、一人称として使用していると判断した)。使用例は以下のとおりである。

- (7) A : はい、景色がいい。あの、日本、わたしは好きです。
- (8) B : ぼくは昭和8年生まれ。
- (9) B : ぼくたちとおんなじや。
- (10) C : ぼくと姉さんと妹。3人。
- (11) C : わたくしたちの台族の子どもは別に国民学校に入る。
- (12) C : おたくたちの、おたくたちのうちはちょうど滑走路のそばにあります。

二人称代名詞には、Cに以下のような「おたくたち」の使用が1回あった。

- (13) C : その時日本人がみんな日本に帰った、おたくたち。(この時は、二人称として発話していると思われたが、真意は不明)。

Bの三人称代名詞の使用では「彼」「彼女」「彼ら」などは使用されず、単数も複数も「あれ」、あるいは複数として「そのたち」の使用があった。

- (14) B : あれ (彼女、妻) は勉強しない。
- (15) B : 日本時代はあれ (彼ら) をセイバンという。
- (16) B : 今の若いそのたち (若い人たち、彼ら)、ほとんど国語はほとんど中国語。

中国語では彼・彼女は「他 [tā]・她 [tā]」、あれ・それは「那 [nā]・它 [tā] ([]内の表記は中国語ピンイン)」であり、「那 [nā]」以外は音が同じで、性別、生物・無生物の区別が曖昧になるためかと思われる。

さらに現代標準日本語でも、三人称の人物を指す、ややぞんざいな表現として「あれ」「それ」などの使用があり、また、九州方言でも「彼」「彼女」を「あい」、「彼ら」を「あいどん」と言う表現があるため、Bの三人称使用が方言形に由来する可能性も否定はできない。

4.2.2 可能表現

データは少ないが、Aは派生動詞を使用した。Bは派生動詞と「することができる」の両方を使用した。後者は発音が不完全であった。Cの談話の中に可能表現はなかった。

- (17) A：お寺の人、同じの歳、話せない。
 (18) B：勉強しないけれど、ほとんど言える。
 (19) B：話す<ことが>できる。 ※< >部分は発音が不完全

Bの発話として以下のような「思い出せる」があったが、その前に言いまちがいがあり、調査者の誘導によって言い直したものであったため、本項の考察対象としては除外した。

- (20) 野田：何か日本語の思い出がありますか。何か覚えている歌とか、あと、子どものとき日本人との遊びとか。
 B：あ、そういうことはね、まだ思い出てる。
 野田：思い出せる。
 B：思い出せる。特に空襲時代ね、毎日日本の軍歌を歌ってる。

4.2.3 否定辞

3人とも標準語形のナイ専用型であったが、Cは1回だけ否定辞ンを使用した。方言形と言われる否定辞ンの他に、3人の談話の中に西日本方言の要素が全くなかったのではなく、これについては4.2.7で述べる。

また、3人の発話で否定辞が使われたのは現在形のみであった。否定辞に限らず、談話

の全体を通して過去の話題であっても現在形が多用された。

表5 否定辞の使用回数

	A	B	C
ナイ	9	8	14
ナイデス	1	0	0
ン	0	0	1
マセン	0	0	3
合計	10	8	18

- (21) A：今わたしの歳同じ、話さない。
- (22) A：お寺の人、同じの歳、話せない。
- (23) A：^{はなし}話しない。
- (24) 野田：古い店で日本語を使うことがないですか。
A：ないです。台湾語だけ。
- (25) B：勉強しないけれど、ほとんど言える。
- (26) B：あれは勉強しない。
- (27) C：でもあまり通じない。
- (28) C：飛行機を見てはいけない。

次節で述べるがCは普通体と丁寧体の切り替えを非常に的確に行う話者であり、丁寧体の否定辞マセンを使用したのもCのみで、その発話も非常に自然であった。

- (29) C：日本語わかりません。
- (30) C：豚を殺してはいけません。

Cが1回だけ使用した否定辞ンは以下のものであった。NS ドメインでの会話というより、自分に向けた独り言のような発話であった。つまり、簡（2011）の指摘どおり、インフォーマル形式の否定辞として使用したものであると言える。

- (31) C：あります、あります。あの、なんとかね、あの、あの、これは、さんしじゅう

に、さんごじゅうご。これは知っている。すぐ出てきます。中国語で「さんば」、わからん。

4.2.4 丁寧体

3人とも丁寧率が15%以上であり、これは簡(2011)に照らすと「丁寧体多用型」にあたる。Bは学習歴が6年と長い、日本占領下に国語として同年代の子どもたちや家族と生活の中で普通に日本語を話していた時期も長かったためであろう、「普通体>丁寧体」であった。それは一人称が「ぼく」で一貫していることにも表れている。Cは質疑応答では丁寧体(36)(37)、思い出話を一人で長く話す場面では普通体(42)(43)になるなどの切り替えがみられた。以下は、丁寧体と普通体の使用回数及び丁寧体使用率である。カウントに用いる採用基準([付録2]として文末に掲載)は簡(2011)に従った。

表6 丁寧体・普通体の使用回数および丁寧率

	A	B	C
普通体	26	40	40
丁寧体	6	10	38
丁寧率(%)	18.8	20.0	48.7

表7 主節および従属節別にみる丁寧体・普通体の使用回数および丁寧率

		A	B	C
【主節】	普通体	26	35	38
	丁寧体	6	10	38
	丁寧率(%)	18.8	22.2	50.0
【従属節】	普通体	0	5	2
	丁寧体	0	0	0
	丁寧率(%)	-	-	-

以下は、丁寧体の使用例である。

- (32) A: そうです。
- (33) A: はい、少し。聞いて、わかります。
- (34) A: あの、日本、わたしは好きです。

- (35) B：子ども時代はほとんど日本語を言っています。
- (36) C：その時、日本時代にね、[地名]の国民学校といいます。
- (37) C：日本人の兵隊はね、みんなときどき家へ来て、食べ物を。かわいそうですよ。

一方で、普通体の使用例は以下のものであった。

- (38) A：うん、忘れた。わたしは少しだけ、まだ覚えてる。
- (39) A：あの時は、わたしの一番好きは日本語。1年生勉強したこと、今わたしの歳同じ、話さない。
- (40) B：ぼくは[地名]で生まれた。
- (41) B：今はほとんど中国語。ほとんど原住民でもね、年寄りももう死んでしまった。
- (42) C：そして、その肉をとなりとかにね、いくらですか、いくらですか、と。その時ね、あの、警察がとっても厳しい。豚を殺している、その声を。
- (43) C：だからね、豚を殺すときね、静かに、豚を水の中に入れて。死んだら声がない。殺す。それを見た。

4.2.5 「でしょ」の用法

2.3.5で、「でしょ」「でしょう」の用法は<推量>と<確認要求>に大別されるが、簡(2011)では、<新情報認知要求>という新用法がみられたことを述べた。

本調査において、A、Bのみが「でしょ」「でしょう」を使用した。簡(2011)の言う「新用法」にあたるものはなかった。

本調査の「でしょ」「でしょう」の発話例は以下の通りであった(< >内は用法)。

- (44) 野田：今日は中秋節だからお寺で何か行事があったんですか。
A：日本でも同じでしょう。<確認要求>
- (45) B：(名前を書く場所は)ここに書くの。この上でいいでしょ。<確認要求>
- (46) B：とくね、空襲時代ね、日本人がぼくのうちに疎開している。ぼくも日本の子どもと一緒に育ててる。
野田：そうですか、ありがとうございます。
B：ええ、疎開人がぼくのうちに住んでいる。

野田：そうですか。

B：高雄市の日本人がね、ぼくのうちに疎開した。高雄が危ないでしょ。毎日空襲してる。＜確認要求＞

簡（2011）の分析と同項目の本調査の結果は以上である。以下、4.2.6から4.2.10では、その他の項目での3人のインフォーマントの発話からの気づきを述べる。

4.2.6 過去時制の曖昧さ、アスペクトの的確さ

本調査では全体的にみて過去形のデータが少なかった。その理由の1つは、[付録1]の本調査で用いた調査（質問）票にある。属性の⑤「どこで日本語教育を何年受けましたか」とQ1の「日本語をいつ使いますか（過去に使いましたか）」の2項目しか、過去形使用の機会を与えていないことであり、必然的に要求される答えが非過去形に偏った。しかし、B、Cの発話では、思い出話のように過去形の使用がふさわしい場合であっても非過去形の使用が多用される傾向があった。

以下は過去形の使用例である。

- (47) A：兄弟もみんな結婚した、1人。
- (48) A：先生もう帰った。
- (49) A：うん、忘れた。わたしはまだ少しだけ、覚えてる。
- (50) B：ぼくは「地名」で生まれた。
- (51) B：高雄市の日本人がね、ぼくのうちに疎開した。
- (52) C：姉さんは勉強した。その時ね、6年生、6年生卒業したあと、またそのまま仕事した。
- (53) C：わたしを台湾の田舎のところに疎開、疎開した。兄弟離れた。

B、Cの発話にみられた「過去のことを非過去形で話した」例は以下のものであった。

- (54) B：空襲時代ね、日本人がぼくのうちに疎開している。ぼくも日本の子ども一緒に育ててる。

- (55) B：特に空襲時代ね、毎日日本の軍歌を歌ってる。
- (56) B：ほくね、中国の教育は受けないけれど、中国語はほとんど聞いてわかる。全部言えるんだ。
- (57) B：その時ね、今まで日本時代はあれをセイバンという、バンジン。ほとんど日本語で通じる。話は日本語で。降伏以後も日本語。
- (58) C：やっぱり日本、学校の中にも日本人があります。校長先生とかね。
- (59) C：それでおたくたちの、おたくたちの、うちはちょうど滑走路のそばにあります。
- (60) C：国民学校の日本人の子ども、日本の学校にやる。わたくしたち台族の子どもは別に日本の学校に入る。
- (61) C：その時、あの、僕もね車の中におる。

一方で完了形の「～しまう、しまった」、継続の「～ている（てる）」は3人とも的確に使用していた。

- (62) A：わたしは少しだけ、まだ覚えてる。
- (63) A：台湾に住んでいる。
- (64) B：疎開人がほくのうちに住んでいる。
- (65) B：ほとんど原住民でもね、年寄りはおう死んでしまった。
- (66) B：歳があるからな、頭も悪い。ほとんど忘れてしまった。
- (67) C：爆弾を落としていたこと、はっきりあります。
- (68) C：今もこれで日本の軍歌を聞いていますよ。

4.2.7 西日本方言の影響

簡（2011：22）によれば「1930年から1940年までの台湾全人口のうち、日本人は約5%を占めていた。そのうち約70%の人が西日本出身者であった。（略）人数の多い順に、鹿児島、熊本、福岡、広島、佐賀、長崎、山口となっている。この上位7県は全て西日本にあり、その人数は日本人全体の約46%を占めていた」。さらに「（西日本方言話者との）接触は台湾の人々の日本語に西日本方言要素の使用という形で現れる」ということであった。

また、「コケル、（野菜を）炊ク、足ル、オル、否定形式「チガウ」、確認要求の（ト）チガウ、否定辞ンなど西日本方言的な語彙や文法形式が用いられているのだが、これは、

台湾に移住した日本人に鹿児島や熊本、福岡など九州をはじめとした西日本出身者が多かったことの影響であろう」とのことであり、本調査においても西日本方言要素に注目した。

4.2.3 否定辞で述べたとおり、本調査ではCの発話に1回だけ否定辞ンがあった。また、別の西日本方言要素としてヤ、オル（大西編2016：237、226）などの発話があった。

- (69) A：以前な。若いとき。今はもう年寄りや。
- (70) B：おんなじや。今の若いそのたち、ほとんど国語はほとんど中国語。
- (71) B：ほくたちとおんなじわ。<「や」の言いよどみか？>
- (72) C：空襲警報があるから、ここにおると危ない、爆弾、わたしを台湾の田舎のところに疎開、疎開した。兄弟離れた。
- (73) C：その時、あの、僕もね車の中におる。

4.2.8 存在動詞「いる」の「ある」への集約

存在動詞「いる（いない）」の「ある（ない）」への集約がみられた。中国語、閩南語、客家語ともに存在動詞での生物・無生物の区別がないことが影響していると思われる（王1982：23、遠藤2016：396）。Cはイルを1回、方言形のオルを2回使用した。

表8 主語の生物・無生物別の存在動詞の使用回数

話者	A			B			C		
	生物	無生物	合計	生物	無生物	合計	生物	無生物	合計
アル	0	0	0	2	1	3	0	1	1
ナイ	1	4	5	0	3	3	0	6	6
アリマス	0	0	0	0	0	0	1	6	7
アリマセン	0	0	0	0	0	0	0	0	0
イル	0	0	0	0	0	0	1	0	1
イナイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
イマス	0	0	0	0	0	0	0	0	0
イマセン	0	0	0	0	0	0	0	0	0
オル	0	0	0	0	0	0	2	0	2

以下は主語が生物の場合に「ある（ない）」を用いた例である。

- (74) A：子どもはない。1人だけ。
- (75) 野田：先生は日本人でしたか。
B：先生は日本人も台湾人もある。(発話の意味：日本人の先生も台湾人の先生もいた。)
野田：どちらもでしたか。
B：うんうん。でもある。
- (76) C：やっぱり学校の中にも日本人があります。校長先生とかね。

Cが用いた「イル」「オル」の使用例は以下のものであった。

- (77) C：山の中にみんな原住民たくさんいるんですよ。
- (78) C：その時ね、うちの父さんがね、ここにおると危ない、爆弾、わたしを台湾の田舎のところに疎開、疎開した。兄弟離れた。
- (79) C64：その時あの、僕もね車の中におる。

4.2.9 副詞、接続詞、助詞、助動詞の的確な使用

3人とも、非常に文脈に合ったかたちで副詞、接続詞、助詞、助動詞を使用した。Aの発話は言い差しや体言止めなど不完全なものが多かったが、それでもこれらの使用は頻繁にみられた。

- (80) A：先生もう帰った。
- (81) A：病院。ぜんぜん。(発話の意味：病院で日本語を使う機会は全くない)
- (82) A：わたしは少しだけ、まだ覚えてる。
- (83) B：勉強しないけれど、ほとんど言える。
- (84) B：出ます。まだやはりね。高いとか安いとか。日本語でまだ。
- (85) B：つまりぼくたちはね、将来の兵隊だから。
- (86) B：ほとんど忘れてしまった。
- (87) C：6年生卒業したあと、またそのまま仕事した。
- (88) C：いっぱい出てくる。やっぱりその時の日本のね、すぐ出てきます。
- (89) C：それぞれ。はっきり、はっきり。

(90) C：おたくたちの、うちはちょうど滑走路のそばにあります。

副詞、接続詞や助詞、助動詞を会話の中で自然に使用することは、日本語学習者にとってはやや困難である。時制や語彙選択の間違いがあっても、このように副詞、接続詞や助詞、助動詞を自然に使用するため、会話全体が流暢且つ自然に捉えられるのである。

4.2.10 他動詞「思い出す」

Bの発話の中に非常に興味深い例があった。「思い出す」を「思い出る」と言い、複合動詞の後項動詞が自動詞化した。

(91) 野田：何か日本語の思い出がありますか。何か覚えている歌とか、あと、子どものとき日本人との遊びとか。

B：あ、そういうことはね、まだ思い出てる。

野田：思い出せる。

B：思い出せる。特に空襲時代ね、毎日日本の軍歌を歌ってる。

(92) B：それね、時々この歌を見るとね、当時のことを思い出るん。

日本語の「思い出す」は他動詞であるが、自発的、自動詞的な意味合いもある。中国語では自発を含意する「想起来」である。Bは「思う」に自動詞「出る」を後続させて複合動詞「思い出る」を作り上げているのではないと思われる。あるいは、調査者の質問にも用いられている名詞「思い出」が動詞化した可能性もあり、(92)では目的語が示されている。

5. 簡 (2011) と本調査の比較

本節では、簡 (2011) と本調査との比較が可能な2項目において比較表を作成し、考察を加える。1つ目は否定辞の使用 (5.1)、2つ目は丁寧体の使用 (5.2) である。

簡 (2011) では全ての項目がLF、NSドメイン別に集計されたが、本調査はNSドメインのみであるため、本稿では簡 (2011) のNSドメイン部分のみを抽出して比較対象とした。

また、インフォーマントを表す記号として「C」が両調査に用いられており、別人であることを示すために、以降（5および6）の両調査を比較する記述においては簡（2011）の「C」を「C1」、本調査の「C」を「C2」と表記する。

5.1 否定辞の使用における簡（2011）と本調査の比較

以下は否定辞の使用における簡（2011）と本調査の比較表である。否定辞ンとナイでは、両調査ともナイの使用のほうが多かった。

表9 否定辞の使用回数および使用率の簡（2011）と本調査の比較

簡（2011） NSのみ	T	C1	S	K	Y	O	L	H	本調査	A	B	C2
ン ()は、うち「ワカラン」の回数 使用率(%)	10 (9)	0	16 (3)	0	6 (6)	34 (34)	0	20 (15)	ン ()は、うち「ワカラン」の回数 使用率(%)	0	0	1 (1)
	17.9	0.0	22.9	0.0	20.7	22.5	0.0	74.1		0.0	0.0	5.6
ナイ 使用率(%)	38 67.9	32 82.1	44 62.9	18 64.3	23 79.3	117 77.5	37 100.0	7 25.9	ナイ 使用率(%)	9 90.0	8 100.0	14 77.8
ンデス 使用率(%)	3 5.4	0 0.0	0 0.0	1 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	ンデス 使用率(%)	0 0.0	0 0.0	0 0.0
ナイデス 使用率(%)	2 7.2	5 25.6	0 0.0	4 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	ナイデス 使用率(%)	1 10.0	0 0.0	0 0.0
マセン 使用率(%)	3 5.4	2 5.1	10 14.3	5 17.9	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	マセン 使用率(%)	0 0.0	0 0.0	3 16.7

表中には「ンデス」「ナイデス」「マセン」を示したが、簡（2011）ではンとナイの使用に限定して考察がなされたので、ここでもンとナイについてのみ述べる。

簡（2011）ではNSドメインで方言形否定辞ンよりも標準語形ナイが多用された。話者は否定辞ンに方言的要素ではなく、インフォーマル形式であるとの認識を持っているようであった（簡2011：105）。C1、K、Lはンを一度も使用しなかった。T、S、Y、Oのンとナイの合計使用回数のうち、ナイの使用率が75～80%であった。逆にHの使用ではンがナイをはるかに上回っていた。

ンの使用の内容を見ると、S以外で「ワカラン」の使用が圧倒的に多かった。簡（2011）は、日常会話において「ワカラン」の使用頻度が高く、また「ラ行五段動詞にンが用いられやすいのは、ンがラと結合して一つの形態素となり、ラ行五段動詞での否定形が「～ラン」と見なされたためと考えられる（簡2011：105）」とした。

本調査ではA、Bはナイ専用型で、ンの使用はなかった。C2は1回だけンを使用し、その内容は「ワカラン」であった（93）。この発話も自分に向けた独り言のようなもので

あったので、インフォーマル形式として出現したものであると考えられる。

- ⑨3 C 2 : あります、あります。あの、なんとかね、あの、あの、これは、さんしじゅうに、さんごじゅうご。これは知っている。すぐ出てきます。中国語で「さんば」、わからん。

概して、NS ドメインで話者にとってインフォーマル形式との認識がある否定辞よりナイの使用への偏りが見られる。簡 (2011) では否定辞の使用はラ行五段動詞に多く、特に「ワカラン」の使用頻度は突出している。本調査でも「ワカラン」がC 2の発話に、1例ではあるが確認された。

5.2 丁寧体の使用における簡 (2011) と本調査の比較

以下は丁寧体の使用における簡 (2011) と本調査の比較表である。使用回数に含める基準は、文末 [付録 2] に示した。簡 (2011) の分析では「丁寧体多用型」と「丁寧体稀用型」が同数 (各 4 人) ずつに分かれた。本調査では全員が「丁寧体多用型」であった。

表10 主節および従属節別にみる丁寧体・普通体の使用回数および丁寧率の簡 (2011) と本調査の比較

簡 (2011) NSのみ		T	C 1	S	K	Y	O	L	H	本調査				
主節	普通体	308	208	566	213	188	798	241	282	主節	普通体	26	35	38
	丁寧体	67	84	120	58	5	6	1	0		丁寧体	6	10	38
	丁寧率 (%)	17.9	28.8	17.5	21.4	2.6	0.7	0.4	0.0		丁寧率 (%)	18.8	22.2	50.0
従属節	普通体	43	23	121	15	9	83	33	8	従属節	普通体	0	5	2
	丁寧体	0	4	9	0	0	0	0	0		丁寧体	0	0	0
	丁寧率 (%)	0.0	14.8	6.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		丁寧率 (%)	-	-	-
主従合計	普通体	351	231	687	228	197	881	274	290	主従合計	普通体	26	40	40
	丁寧体	67	88	129	58	5	6	1	0		丁寧体	6	10	38
	丁寧率 (%)	16.0	27.6	15.8	20.3	2.5	0.7	0.4	0.0		丁寧率 (%)	18.8	20.0	48.7

簡 (2011) では「丁寧体多用型」のインフォーマントは主節・従属節合計の丁寧率が15%以上 (T、C 1、S、K) であった。「丁寧体稀用型」は丁寧率3%以下 (Y、O、L、H) であり、明確に二分された結果になった。C 1とSは従属節内でも丁寧体を使用し、その内容はC 1の4例全てとSの9例中8例が「カラ」への接続、Sの残り1例が「ケド」への接続であった。

簡（2011）の丁寧率の基準をあてはめると、本調査のインフォーマントは3人とも「丁寧体多用型」と言える。しかし、Aは学校教育での学習歴が短い（7歳から約1年）ためか、言い差しや体言止め、倒置など不完全に終了する文が多かった。従って使用回数のカウントの除外となった使用が多く、切り替えに関する規則性は読み取れなかった。Bは、本調査においては普通体を基本とする話者であったが、丁寧体も多用した。しかし、切り替えの規則性は明確ではなかった。本調査C2の丁寧率は48.7%と、簡（2011）を含めても突出して高かった。その使用法に過剰使用などはみられず、切り替えは現代日本語文法として適切で、不自然さはなかった。

本調査C2の丁寧体と普通体の切り替えには、ドメインに関する規則性が見られ、ドメインの3要素「参与者」「場所」「話題」のうち、「話題」が影響していると考えられる。調査者の質問への応答、つまり短い文での調査者との会話のラリーでは丁寧体が使用され、思い出話を早い展開で一人で長く話す場面では普通体が多用された。簡（2011）も「丁寧体の使用は調査者の質問に答えるという質問・応答のペア、あるいは、調査者に対する質問や知らせなど聞き手目当て性の高い発話の場合に用いられやすいという談話面の特徴がある（簡2011：111）」とした。C2の丁寧体の発話の規則性はその指摘のとおりであった。本調査C2の「質問・応答場面」と「思い出話の語り場面」の丁寧体と普通体の発話回数を以下の表にまとめた。

表11 本調査C2の話題ドメイン（「質問・応答」と「思い出話の語り」）別の丁寧体・普通体の使用回数

	丁寧体	普通体
質問・応答	22	2
思い出話の語り	14	35

※どちらにもあたらないと考えられるものは除外した。

6. まとめ

本調査では日本統治下で日本語を学校教育として身につけた台湾人たちの現在の日本語使用について、いくつかの項目で分析と考察を行った。

簡（2011）の分析項目に照らすと、一人称代名詞に日本語以外の語彙を用いる現象は見られなかった。可能表現は使用例が非常に少ない中で、派生動詞と「デキル」系の使用の

両方があったが、後者は発音が不完全であった。否定辞にはほぼ標準語形ナイが用いられた。〈丁寧さ〉では、本調査のインフォーマントは非常に丁寧率が高いという結果となった。〈新情報認知要求〉の「でしょ」「でしょう」は本調査では使用されなかった。

本調査で確認された単純化の現象として、生物・無生物の区別を避ける傾向が挙げられる。例えば「三人称代名詞」に使用された「あれ（彼、彼女の意）」や「その（彼ら）」の使用、存在動詞使用における「ある」「ない」への偏りである。

また、単純化の一つとして過去形の不使用傾向がある。現在の彼らの第一言語（閩南語、客家語）や中国語の影響を受けたうえでの単純化が本調査では現れたのかもしれない。しかし分析が可能なデータ量が得られなかったため、可能性を指摘するのみである。

本調査のAの日本語は未完成文が多いにも関わらず、言いたいことが十分に伝わるものであった。一方でB、C 2は非常に流暢に話した。Bは普通体中心、C 2は調査者や同席者と質問・応答になる場面では丁寧体を使用した。思い出話を早い展開で一人で長く話す場面では普通体を多用し、しばしば文法が崩れて、Aと同様に倒置や言い差しになったり、体言で終了したりした。簡（2011）のインフォーマント群の日本語使用の平均像に比べて、本調査のインフォーマントの日本語の使用状況は、現代の日本国内で話される共通語により近いものであった。

3人に共通するのは戦後、成人してから日本語の再学習を行っている点である。B、C 2は今も学びを継続している。日本のドラマや教材に触れることは容易であり、若い世代に日本語学習ブームが起きていることもあって、環境も整っている。そのような、学習の積み上げの成果が子ども時代に身に付けた日本語の発展型としての現在の使用に結び付いていると言える。

また、簡（2011）との共通項目の比較において、否定辞の単純化が確認できた。簡（2011）の調査対象はリングフランカとしての使用が半世紀以上を経た日本語、本調査の対象はリングフランカではないが再学習を積み上げ、今も日本語を話せる人の使用であり、対象が異なるが、変化の様相を同じくする一面を有している。

<参考文献>

- 遠藤雅裕（2016）『台湾海陸客家語彙集 附同音字表』中央大学出版部
王育徳（1982）『台湾語入門』日中出版
大西拓一郎（編）（2016）『新日本言語地図－分布図で見渡す方言の世界－』朝倉書店
亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典第6巻術語編』三省堂

簡月真 (2002) 「台湾に残存する日本語にみられる方言的要素－存在動詞オルと否定辞ンを中心に－」
『日本本源研究会第75回研究発表会発表原稿集』, pp. 9-16, 日本方言研究会

簡月真 (2005) 「共通語として生きる台湾日本語の姿」『国文学解釈と鑑賞』70(1), pp.197-220, 至文堂

簡月真 (2006) 「台湾高年層の日本語にみられる一人称代名詞」『日本語の研究』2(2), pp.61-76, 日本語学会

簡月真 (2011) 『台湾に渡った日本語の現在－リングフランカとしての姿－』明治書院

渋谷勝己・簡月真 (2013) 『旅するニホンゴ』岩波書店

三宅知宏 (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89, pp.111-122

三宅知宏 (1997) 「『愛だろ、愛っ。』－推量と確認要求」『言語』26(2), pp.68-73

Fishman, J. (1964) Language maintenance and language shift as a field of inquiry. *Linguistics* 9, pp.32-70

【付録1】 本調査で用いた調査（質問）票

調査（質問）票

1)お名前 2)性別 3)居住地

① 生年

② 出身地

③ 民族

④ 第1言語 第2言語 第3言語

⑤ どこで日本語教育を何年受けましたか？

Q1. 日本語をいつ使いますか？（過去に使いましたか？）

1	家庭内	誰と→
2	隣家	
3	暗算・祈り	(心の中で)
4	公的な場	職場、病院、買い物、他

Q2. どんとき、日本語を使いますか？

Q3. 日本語が便利だと思う場面がありますか？

Q4. 日本語について、どう思いますか？

【付録2】 簡（2011）および本調査の丁寧体・普通体のカウントに用いた基準

- ※表中の「丁寧率」は、丁寧体使用率の略である。
- ※表は、主節及び従属節の述語を肯定・否定、過去・非過去の区別なしに集計してある。
- ※普通体と丁寧体の対立が一般的でないものは含まれていない。例えば方言形「行きキラ」や「エー、ナンツテカテ」のような独り言の使用。
- ※命令文およびソウ（デス）ネのようなあいづち・応答形式やアリガトウ（ゴザイマス）、スマナイ（スママセン）などの定型表現は対象から除外した。

※「だろう」「でしょう」は含まれていない。

※主節の集計にあたっては、中途終了の発話や「カラ・ガ」など接続助詞による言い差しの文は省いた。

※従属節については、引用節や連体節の中に収まっているもの、接続助詞「ナガラ・ナラ・バ・ノニ」が後続するものなどは普通体と丁寧体との対立が明確ではないと考え、除外した。また、「～タライイ・～ナケレバナラナイ・～ナイトイカナイ・～ナイトダメ」など後接する言語形式が密接なものも省いた。なお、「テ・ナイデ・デモ」は、話者の中に汎用と思われるものが観察され、従属節内での位置づけが難しいため、今回の考察対象としていない。インフォーマントの中には「タラ」のほかに「ナッター」という独自の形式が作り出されているが、この「ナッター」は普通体と丁寧体との対立が明確でないため、表には含めなかった。